

マルロー『侮蔑の時代』における身体の表象

La représentation du corps dans *Le Temps du mépris* de Malraux

上江洲 律子

Ritsuko Uezu

Résumé

Dans *Le Temps du mépris* d'André Malraux (1935) on observe une certaine corrélation entre « l'esprit » et « le corps » du protagoniste. Du point de vue du « corps », d'un côté, celui-ci est à la fois considéré comme inférieur à « l'esprit » et opprimé en tant qu'objet de supplice, et de l'autre côté, il prend l'initiative de faire front aux dangers fatals en avançant ou dominant « l'esprit ». Cela souligne en fait la réhabilitation du « corps » qui a été longtemps sous-estimé en Occident, en passant pour la partie de l'être sous dépendance de « l'esprit ». C'est un aspect nouveau de l'homme que Malraux retrouve en Orient, « une notion nouvelle de l'homme » du point de vue de l'Occident, et que l'auteur représente déjà dans ses romans qui se déroulent en Orient comme *La Tentation de l'Occident* (1926) et *La Voie royale* (1930). En succédant à ces romans, *Le Temps du mépris* attribue de plus au « corps » le rôle de s'opposer au mépris de la vie, c'est-à-dire, à l'acte de se tuer, qui est décrit comme un bel acte dans son autre roman intitulé *La Condition humaine* (1933), si bien qu'il y présente « un élément nouveau » quant à l'homme affrontant l'absurdité de la mort.

はじめに

フランスの作家アンドレ・マルロー (1901-1976年) の小説『侮蔑の時代』¹ は、1935年、当時フランスにおいて新しい文学の潮流の発信源としての役割を担っていた雑誌『N.R.F. (ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ)』で発表された後、時を逸することなく刊行された。小説の舞台は、アドルフ・ヒトラー (1889-1945年) が国の主導権を掌握した後のドイツの強制収容所と、そのドイツに割譲される前のチェコスロバキアの首都プラハであり、作品中に示された年代からも分かるように (TM, I, p.783)、ほぼ同時代を描いた作品となる。

ところで、この作品の出版の前年に、マルローは、同じくフランスの作家アンドレ・ジッド (1869-1951年) に伴い、ドイツで不当に逮捕されたブルガリアの共産党員ゲオルギ・ディミトロフ (1882-1949年、第二次世界大戦の後にブルガリアの首相に就任) やドイツの共産党員エルンスト・テールマン (1886-1944年、第二次世界大戦中に強制収容所において処刑) の釈放を求めてベルリンに赴いている。そして、同じく1934年、モスクワで開催された第一回ソヴィエト作家大会に出席することになる。ちなみに、彼がフランスを代表する作家の一人としてその会議に招待されたのは、彼の活動や作風などから周囲の人々に「反ファシスト」と目されていたからである。このようなマルロー本来の傾向や、作品の出版と同時期に見られる一連の行動を考慮して、『侮蔑の時代』は、反ファシズム的気運を喚起するために意図されたものとして見なされることになる²。

実際、マルローは、作家大会に出席するために訪れたモスクワで、ファシズムの抑圧を被った人物に出会っていることが知られている³。その人物とは、ドイツの共産主義の作家ウィリー・ブレーデルである。ブレーデルは、作家大会の翌年の1935年に、13か月に及ぶ自らの強制収容所における経験を著作として刊行した。ただし、そのブレーデルの著作の翻訳版がフランスで出版されるのは1936年のことであり、それに先立ち、1935年にロンドンで初めて

出版された同著作のドイツ語版を、マルローが自作の発表前に読んでいたと断言することはできない⁴。しかし、当時彼の伴侶であり、モスクワの大会にも同行したクララ・マルローが、『侮蔑の時代』をブレードルの経験から着想を得た作品として認めていることを考慮すれば、マルローが、直接ブレードルからドイツの強制収容所における経験を聞き得たと想定することは十分に可能である⁵。その結果、『侮蔑の時代』は、ドイツのファシズムによる支配の現状を、小説というメディアを通して広く伝えようと試みた作品として見なされているのである⁶。また、初期の幻想的な童話を除いて、時系列的にマルローの小説創作の歩みをたどると、同作品はアジアを舞台としない初めての作品となる。そのことが注目されて、彼の新たな文学的試みとして指摘されていることも付け加えておく⁷。

ところで、『侮蔑の時代』について考慮する際、しばしば指摘されることは、マルローがこの作品の再版をほぼ認めなかったということである⁸。そのことを反映するように、ジャン・カルデュネは、同作品における語りの人称の不統一な点を指摘しながら、マルロー自身がインタビューで発した「駄作」という言葉を借りて、否定的な評価を下している⁹。しかしその一方で、発表当初から、高い評価を示す論考が存在しないわけではない。例えば、マルセル・アルランによれば、『侮蔑の時代』は、共産主義という概念を通して「新しい要素」がもたらされた作品であり、「マルローが今までに書いた、最も充実していて、最も感動に恵まれた、技術的に最も美しい頁」を有する作品となる¹⁰。それを踏襲するように、ウォルター・G・ラングロウは、同作品の基盤には「新しい人道主義的な友愛」があると述べて、『人間の条件』あるいは『希望』といったマルローの大作には及ばないながらも、「議論の余地のない美点」を有していると見なしている¹¹。つまり、作品の評価は依然として両義的であり、否定と肯定、両極に振れながら定まらないと言える。

本論文は、上記で述べた肯定的な評価の流れを汲みながら、『侮蔑の時代』を、小説における「身体」の表象という主題のもと、マルローが1926年に出版した『西欧の誘惑』および1930年に発表した『王道』、そして、1933年に刊行した『人間の条件』という3つの作品と関連させて考察を進める。ただし、既に指摘されている「新しい人道主義的な友愛」に関する再考は別の機会に譲るとして、マルローの小説の特徴の推移と、『侮蔑の時代』において見られる、また別の「新しい要素」を浮き彫りにすることを試みたい。

1. タイトルに記された「侮蔑」が喚起するもの

『侮蔑の時代』の主な登場人物は、ドイツ人で共産党員のカスナーという人物である。マルロー自身、作品の序文において、「(作品の世界は) 2つの登場人物、主人公と彼の人生(生命)の意味に還元される」(TM, P, p.775)と述べているように、作品の焦点はカスナーの行動と心理に当てられている。構成について言えば、序文に続いて8つの章から成る小説であり、プロットの観点から概観すると、前半と後半、大きく2つに分けることができる。まず、前半となる第1章から第5章において、共産主義運動における重要人物として強制収容所に入れられたカスナーの姿が描かれる。そして、第6章から第8章に至る後半では、彼の身代

わりとして逮捕された人物のおかげで強制収容所から解放されたカスナーが、嵐の中を飛行機でプラハへと移動し、そこで自分の妻と子どもとの再会を果たすまでが描かれている。一見して、先程引用したマルローの序文の言葉（*TM*, P, p.775）の妥当性が分かるだろう。同作品では、主人公が、生命を喪失するほどの危機に陥る状況が、前半と後半、それぞれに一度ずつ繰り返すように設定されているのである。前半では、拷問と死を想起させる強制収容所という「場」への収容であり、後半では、飛行中の飛行機内という却って無防備な状態での嵐への遭遇となる。いわば人為的な要素と人間の力の及ばない要素、人間の生命をめぐる2つの脅威が提示されていると言えよう。

ここで作品のタイトルに示された「侮蔑」という言葉に注目したい。「侮蔑」とは、原題のフランス語« mépris »に相当するもので、「軽蔑、軽視、無頓着、侮辱的言動、侮辱、つれなさ、つめたさ」という語義が見られる。上記にまとめた作品の概要に留意すれば、人間によるものであれ、「超」人間的なものによるものであれ、人間の生命が軽視されることを象徴的に示すものであると想定することができるだろう。そのことについては、作品内で一度だけ「侮蔑の時代」（*TM*, V, p.813）という言葉が用いられる場面において確認することができる。それは、前半の最終章、強制収容所の独房の中で、カスナーが父について回想する場面となる。そこでは、彼の父が炭鉱で働いている時に、坑内で起こった爆発について語られている。火が燃え広がり、救出に向かった仲間も命を失うといった過酷な状況で、坑外にいた彼や仲間たちの努力も空しく、40時間後、責任者たちの判断のもと、炭鉱は彼の父と200人の鉱員を残したまま封鎖されることになったというエピソードが示されるのである（*TM*, V, p.812）。勿論、その場面では救出のための努力が行われていないわけではない。しかし、たとえ遺体と対面することになったとしても、最後まで救出の努力を続けなかったという点において、200人もの生命が、いわば切り捨てられて無視されたという面は否めない。その出来事を思い出しながら、カスナーが父の生きた時代を「侮蔑の時代」と称していることから、そこには「生命の軽視」という意味が込められていると見なすことができるのである。このようにタイトルによって示唆された主題がどのように表現されているのか、「身体」の表現に着目しながら確認していきたい。

2. 「精神」の「身体」に対する優位性

強制収容所におけるカスナーの描写に関して最初に指摘したい点は、次の引用に示されている「精神」と「身体」の関係である。強制収容所の独房に入れられた直後、暗闇の中で自分がある「場」を確認している際に、独房の壁に書かれた落書きを発見することになる彼の描写を確認しよう。

彼の精神が、知性のない彼の身体と同じように、ぐるぐると回っている時に（私はだんだん馬のようになっているに違いない）、彼の眼差しは既に一点を見つめていた。彼の眼は彼の脳よりも先に理解していたのだ。というのも、独房の壁は、その下側が、落書きで覆われていたのである。（*TM*, I, p.784）

この引用において明白に示されていることは、人間の在り方における「精神」と「身体」の二元論だと言えるだろう。ちなみに、ここで「身体」という単語には、「知性のない」«idiot»という形容詞が付与されている。この形容詞は「獣のような」人間を想起させるものであることから、引用の括弧内に記されたカスナーの独白における「馬」のイメージを先取りしつつ、それを補強するものとして見なすことができる。また、その一方で、その単語は「愚かな、ばかな」という否定的な語義を有するものでもある。そのことを考慮すると、同作品における「精神」と「身体」の関係には、「精神」の「身体」に対する優位性という特徴があることを窺うことができる。

西洋の人間について見られるこのような「精神」と「身体」の関係は、拙稿「マルロー『西欧の誘惑』における身体性の萌芽」¹²で指摘したように、既に小説『西欧の誘惑』¹³において提示されているものである。この作品では、西洋が東洋との比較を通して考察されているが、その際、「精神」は、西洋の人間にとって、自らを生贄として捧げながら従属するべき一種の神としての役割を果たしていると述べられている。その一方で、「身体」の方は、十字架に磔にされたイエスのイメージとともに、拷問を受け死刑に処されるべき虐げられた存在として見なされている。そして、このように存在価値を否定されたあるいは抑圧された「身体」が、キリスト教的とも言うべきくびきから解放されて、尊厳の回復の可能性を獲得する「場」として設定されているのが東洋となるのである。それこそが、西洋の人間にとっての東洋という「場」の機能であり、そこで実現されることは、マルロー曰く「自分が何であるかについての、そこでしか成し得ない発見」¹⁴、言葉を換えれば、自分自身の新たな側面の発見となる。つまり、マルローは、東洋という「場」を、そこでは他者となる西洋の人間が、自らについての新たな概念を見出す一種の装置に変貌させている。そして、キリスト教的な価値観のもと、西洋において軽視されてきた「身体」という人間の側面が再評価される可能性を提示したのである。その点に留意しながら、『西欧の誘惑』の後に執筆された『侮蔑の時代』における「身体」の表象について改めて考察しよう。

前述の引用において、「身体」は、「知性のない」という形容詞を付与されることで、「精神」に対して劣等比較されていること、言葉を換えれば、価値のないものとして示されていることについては既に確認した。物語の「場」が強制収容所であることも示唆的だと言えるだろう。強制収容所の場面では、必然的に、比喩的ながらも「拷問を受けるべき肉体」(TM, II, p.791)という表現が見られ、虐げられた「身体」というイメージが喚起されている。ちなみに、強制収容所の独房において、カスナーは悪夢に悩まされることになる。ハゲタカと同じ檻の中に入れられて肉体を啄ばまれるという、まるでギリシア神話の巨人ティテュオスのエピソードを彷彿させるような悪夢もまた、虐げられた「身体」のイメージに与するものとして見なすことができるだろう (TM, II, p.792)¹⁵。そして、このような「身体」に対する虐待行為は、単なるイメージに留まらない。カスナーは独房で2人のナチ突撃隊員から理不尽で呵責のない暴力を振るわれることになる。彼は、「腹部」と「あごの先」を殴られた後、コンクリートの地面に倒れて脇腹を打つと同時にそこをブーツで繰り返し蹴られて、最後に下あごと首

を殴られて意識を失うことになるのである (TM, I, p.788)。「身体」は、「卑劣」で「不条理」と称される一方的な暴力の対象と化し、全く尊重されていないと言えよう (TM, I, p.788)。また、「精神」と「身体」については、次のような対比的な表現も見ることができる。「カスナーの精神は、彼の身体が独房の中で歩き回るように、逃避的な思考の中で歩き回っていた」(TM, III, p.798)。この一文では、「精神」と「身体」の両者に関して同じ動詞「歩き回る」«tourner»が用いられている。しかしながら、「身体」の行動範囲は、「独房の中」という非常に狭く閉じた領域に限定されているのに対して、「精神」が羽ばたく夢想の範囲は、いわゆる「逃避的な思考の中」、具体的に言えば、彼が暮らしたドイツの街ゲルゼンキルヒェンから、赤軍の副師団長として派遣されたモンゴルへと広がっていることが分かる (TM, II, pp.792-793)。そこには容易に、抑圧された「身体」と開放された「精神」という対比の構図を指摘することができよう。以上のことから、『侮蔑の時代』では、「精神」が「身体」に対する優位性を有しているのみならず、「身体」が暴力の対象として虐げられる存在となっており、抑圧された存在となっていることが分かる。同作品が、西洋の人間における「精神」と「身体」の関係という観点において、『西欧の誘惑』に連なるものとなっていることは明白である。

3. 「身体」の「精神」に対する先行性

ただし、最初に挙げた「精神」と「身体」に関わる引用には、『西欧の誘惑』では見受けられない興味深い点を指摘することができる。それは「先行」という特徴である。改めて問題となる引用を確認すると、「彼（カスナー）の眼」が「彼の脳」に先立って、独房の壁に書かれた「落書き」を捉えた様子が描かれていることが分かる (TM, I, p.784)。ちなみに、「落書き」は、彼と同様その独房に収容された、いわゆる「同志」が記したものであり、彼らの存在を想起させるものである。「落書き」について思考する時間は、カスナーに拷問という強迫観念から一時的にも逃れる効果をもたらすことになるが (TM, I, pp.784-785)、その重要性については別の機会に考察するとして、「彼の脳」を「精神」、「彼の眼」を「身体」の換喩としてそれぞれを置き換えると、「身体」が「精神」に先んじる形で、小説のプロットに関わる役割を果たしていることが分かるのである。

このような「身体」の「精神」に対する先行性は、カスナーが強制収容所から解放される場面においても見受けられる。既に作品の概要で述べたように、彼は自分の身代わりとなった人物のおかげで強制収容所から解放されることになるが、いまだその事情を知らされることなく、2人のゲシュタポ（ナチス・ドイツの秘密国家警察）に連行されて自動車に乗り、移動している際の描写に注目したい。

セイウチ顔の男は、無言あるいは皮肉った様子で笑っていた。その時、秋の野や木々の模糊とした景色を背景に、彼の犬歯がむき出しになっていた。カスナーには、話しているのは口ではなく、その犬歯のように見えた。

「気分が良くなっているみたいだな。」とセイウチ顔の男が言った。

カスナーは歌を口ずさんでいて—ギリシア正教の司祭の単調な歌を、陽気なリズムで

一、はたとそのことに気がついた。彼の精神がひとり自分が脅かされていると感じていて、彼の身体の方は自由だったのである。(TM, V, pp.814-815)

ここでは、「脅かされている」状態のままの「精神」と、既に「自由」を享受している「身体」という対比の構図が示されている。勿論、このように「身体」が「自由」を謳歌しているのは、単に今まで過ごしていた独房あるいは強制収容所という、閉ざされた「場」から外部へと移動したことによる物理的な「自由」に過ぎないと言えるかもしれない。しかし、この描写の直後に、カスナー自身、自分が釈放された事の次第を知ること、言い換えると、「自由」を獲得したことを知らされることを考慮すれば、上記引用で示される「身体」の表現は、小説のプロットにおける一種の伏線となっていると考えることができる。前触れながら、「身体」は「精神」に先立ち、主人公の強制収容所からの解放を暗示するものとしての機能を果たしていると見なすことができるのである。『侮蔑の時代』では、『西欧の誘惑』における「精神」と「身体」の関係性を継承するだけでなく、そこでは可能性として示唆されるに留まっていた「身体」の価値の回復という新たな側面が明確に付加されていると言えよう。

4. 「精神」と「身体」の新たな関係

ところで、強制収容所に関わる「身体」の描写については、次の点を指摘しておかなければならない。それは歯の痛みに関する描写の変化についてである。カスナーが強制収容所の独房に入れられる前と後の場面を取り上げながら、その描写の変化について見ていきたい。

まず、カスナーがナチ突撃隊員に捕らえられる直前の場面を確認しよう。彼はナチ突撃隊員の監視下にある同志の家で重要な資料の隠滅を実行する。その緊迫した場面において、二度、歯の痛みあるいはその治療に関わる描写が行われる。一度目は同志の家に向かう前である。そこでは、彼の描写に、「30分後、歯医者に行く予約をしていた」(TM, I, p.781)という表現が見られる。二度目は同志の家においてである。ナチ突撃隊員が既に外で待機するという差し迫った状況のもと、彼が問題となる名簿を隠してあった場所から取り出してみ砕く際、「痛みがあった(神経痛かあるいは虫歯か?せめて歯医者に行った後にこうなってくれていたら!)」(TM, I, p.782)という、歯の痛みを焦点化した独白が展開されていることが分かる。歯の痛みに関する描写はこれだけに留まらない。彼がナチ突撃隊員に捕らえられて、強制収容所で役人に取調べを受ける場面においても見受けられる。「彼は奥歯の痛みを苦しんでいた」(TM, I, p.781)という表現によって、歯の痛みが繰り返し提示されることになるのである。それは、まさに強制収容所の独房に入れられる直前であることに留意しておこう。

ところが、それとは対照的だと言えるのが、強制収容所の独房に入れられた後のカスナーの描写だろう。というのも、「彼は自分の歯がもはや痛んでいないということに、苦々しくも気がついた」(TM, I, p.788)と表現されているからである。強制収容所の独房に入れられる前と後の描写に見られる、このような主人公の歯の痛みに関する描写の変化は、何を意味していると言えるだろうか?一般的に、歯の痛みとは、「身体」に関わる作用として見なすことができる。既に確認したように、強制収容所の独房という「場」において、「精神」は

夢想を媒介として自らの開放を獲得するのに対して、「身体」はそこに閉じ込められて抑圧された存在となる。そのことを考慮すると、「身体」の作用の一種である歯の痛みが消失するという描写は、強制収容所の独房という「場」において、「身体」が機能を抑制されていることを示唆するものとなっていると言えよう。そして、その「場」の外部においては、ナチ突撃隊員やナチスの役人に対峙するという、いわば生命の危険をとまなう危機的な状況のもと、歯の痛みという「身体」の作用が、例えば「せめて歯医者に行った後にこうなってくれていたら！」(TM, I, p.782) という独白に見られるように、自分の置かれた状況について判断を下すといった「精神」の作用に影響を及ぼしながら、思考の前景に登場する様子が描かれていることが分かる。これは、先程、カスナーが強制収容所から解放される場面において指摘した「身体」の特徴、「精神」に先行して機能を発揮する「身体」の特徴とともに、「身体」の「精神」に対する優位性を示すものとして考えることができるだろう。ちなみに、このような「身体」の特徴は、『西欧の誘惑』の後、『侮蔑の時代』を発表する以前にマルローが上梓した小説『王道』においても見出されるものである。『侮蔑の時代』における「精神」と「身体」の関係についての考察を進めるために、ここで『王道』の描写の特徴について確認したい。

『王道』¹⁶は、主人公となる2人の西洋の人間が、インドシナ半島の密林の中で、いまだ手つかずに放置されていたクメール遺跡から彫像を掘り出した後、現地の民族であるモイ族の村で奴隷として働かされていた友人を助け出すという物語である。一言でいえば、美術品の獲得と友人の救出という2つの冒険で構成される作品となる。拙稿「マルロー『王道』における身体性」¹⁷で述べたように、作品の主要なプロットとなる2つの冒険では、それぞれ、その成否が決定される究極の局面において、主人公たちは2人とも、意識や思考や知性といった「精神」の働きが後退していく反面、無意識的な反復運動、具体的に言えば、彫像を掘り出すべく遺跡の石をたたき続けることや、奴隷を奪われまいと敵意を抱いて彼らを包囲しているモイ族に向かって歩き続けることなど、本能的とも言うべき身体運動が展開される。言い換えると、冒険の失敗や生命の喪失という危機に対峙する状況において、主人公たちの「身体」の働きが高まっていることが分かるのである。そこに性的なイメージが付加されていることも「身体」に関する表現の特徴の一つとなるが、インドシナ半島という東洋の密林で展開される「精神」と「身体」の相関関係は、「精神」の影に甘んじてきた「身体」が「精神」の前へと躍り出ること、いわば「身体」の復権を意味するものであり、マルローの言葉を借りれば「新しい人間の概念」¹⁸とすべきものとなる。『王道』におけるこのような「精神」と「身体」の関係は、まさに強制収容所の独房を一つの「場」として展開される『侮蔑の時代』の「精神」と「身体」の関係を先取りするものとして見なすことができるだろう。つまり、『侮蔑の時代』では、『西欧の誘惑』で提示された西洋の人間の「精神」と「身体」の関係が踏襲されながらも、『王道』において新たに提起された「身体」に関する価値の回復が、「場」を東洋から西洋へと移しながら反映されていると言えるのである。以上のことを念頭に置きながら、引き続き『侮蔑の時代』の後半の描写について見ていく。

5. 「精神」から主導権を移される「身体」

強制収容所から解放されたカスナーは、偽造された身分に従い飛行機でチェコスロバキアの首都プラハへと移動することになる。しかし、後半の導入部から、「ペーマーヴァルト（「ボヘミアの森」の意）の上にある電をともなつた嵐は、雲の位置が非常に低くなっていて、いろいろな場所に地上の靄（が見える）」（*TM*, VI, p.818）という風景描写によって危険の存在が示される。そして、天候の如何に関わらず出発を望むカスナーの無謀な決断に従った結果、彼と飛行士の2人は嵐に遭遇することになるのである（*TM*, VI, pp.818-825）¹⁹。この場面において、嵐は「昔からの強力な敵」として称されていて（*TM*, VI, p.821）、主人公との間の明白な対立構造が示されている。また、「死の接近」（*TM*, VI, p.823）という言葉が用いられていることから、嵐との遭遇が、主人公にとって生命の喪失をともなう危機的な状況への対峙を意味するものとなっていることが分かる。ちなみに、嵐の中で不能になった飛行機の操作を回復させるため、飛行機を急降下させるという手段が採られることになるが、その際、カスナーは、「彼は自分が震えていることに驚きとともに気がついた。震えているのは手ではない（彼はずっと窓を押さえていた）、ただ左肩だけであった」（*TM*, VI, p.822）という表現によって描写されている。一見して分かるように、「驚きとともに気がついた」という言葉は、認識という「精神」の働きが遅延していることを示すものである。しかも、「左肩だけが震えていた」という彼の無意識的なあるいは反射的な行動は、「精神」の働きに先立って「身体」が機能していることを明確に描き出していると言えよう。前述の強制収容所をめぐる彼の「身体」の描写と同様の特徴が見受けられることが分かるのである。さらに、同じ局面で示される、「1000、950、920、900、870、850、彼は自分の目が自分の頭の前に飛び出しているように感じていた。彼の目は、山がやって来ることを激しく恐れていた—しかしそれにも関わらず、興奮は頂点に達していた」（*TM*, VI, p.823）という描写について考えてみたい。ここでは、急激に下降する飛行機の高度を具体的に記すことによって臨場感を喚起させていると見なすことができるが、それと同時に、「目」という「身体」の部位に焦点が当てられていることが分かる。「目」は動詞「恐れていた」の主語として用いられることで擬人化され、いわば主体性を持って思考を司る存在となっていることが窺える。「精神」に対する「身体」の優位性を示唆するものとして指摘することができよう。また、この描写には、「頂点に達した」と表現される高揚感も見られることに着目したい。このような特徴は、『王道』の描写の考察において取り挙げた、「身体」表現における性的なイメージにつながるものとして想定することができるだろう。実際、この直前の描写において、「彼の全ての感覚が、今、非常に明確に性的な仕方でまとめられていた」（*TM*, VI, p.823）という直截的にも「性的な」という形容詞を用いた表現を見ることができる。以上のことから、『侮蔑の時代』の前半と同様後半においても、「身体」が「精神」に先行して機能していることが分かる。「身体」は、嵐の中の飛行という死の危険がともなう行動の描写の中で、性的なイメージを加味されながら主体性を獲得して「精神」に先行するのである。「身体」が人間存在における主導権を握る様子が展開されていることが窺えるだろう。

6. 「侮蔑」と「身体」との関係

『侮蔑の時代』における主人公の敵、言い換えると、彼が自らの生命を守るために対峙する相手とは、前半の強制収容所の場面に登場するナチス・ドイツの人間および後半のプラハへの飛行の場面で遭遇する嵐となることは今まで見てきた通りである。ここでは、主人公と彼の敵、両者の描写に共通して見られる名詞« *indifférence* »およびその形容詞« *indifférent* »に着目したい。この言葉は、「無関心、無頓着、無感動、冷淡さ、つれなさ」という意味を有していて、「侮蔑」« *mépris* »の類義語となる単語である。先程確認したように、同作品では、「侮蔑」という単語に「生命の軽視」という意味が込められていることを考慮しながら、同様の意味を担う単語« *indifférence* »あるいは« *indifférent* »を付与された描写を見ていこう。

まず、強制収容所の場面において、カスナーに尋問を行うナチス・ドイツの役人の描写に、「同じく無関心な声で言った」« *de la même voix indifférente* » (TM, I, p.781) という表現が見られる。これは、「無関心」を装いながら告白を引き出すという誘導尋問の手段を示すために用いられている言葉ではあるが、尋問という状況において主要な手段となる「声」に「無関心な」という形容詞が付与されていることは注目すべきことだと言えるだろう。また、「静かで、無関心、おそらくこうした憂鬱にうんざりして」« *Tranquille, indifférent, saturé peut-être de cet ennui* » (TM, IV, p.808) という、強制収容所の看守を描写する際に列挙された修飾語の中にも「無関心な」という形容詞を指摘することができる。さらに、強制収容所から釈放されるカスナーを連行する警察官は、自分の身代わりとなって捕まった人物のことを案じるカスナーがその逮捕の正当性を追求する際に、「警察官は再び肩をすくめて、無関心な身振りをした」« *Le policier haussa de nouveau les épaules et fit un geste indifférent* » (TM, V, p.816) と表現されている。ここでは、身振りも合わせて描くことで「無関心」さが強調されていると考えることができるが、いわば拷問の対象となる存在あるいは死すべき存在の決定に対する警察官の無頓着さは、まさに「生命の軽視」という態度を明白に示していると思えることができる。そして、主人公を含む強制収容所に収容された人間たちも、「拷問が送り出してきた無関心な代表团」« *une délégation indifférente envoyée par la torture* » (TM, II, p.795) という表現に見られるように、「無関心な」という形容詞とともに比喩されているのである。以上を考慮すると、「*indifférent*」という単語は、生命の喪失を伴う暴力に関わる存在、言い換えると、暴力の行使者と対象者、その両者を特徴づけるものとなっていることが分かる。

ただし、後半において、カスナーが生命を賭して対峙することになる嵐の描写に関しては、直接的に名詞« *indifférence* »あるいは形容詞« *indifférent* »という単語を見ることはできない。しかしながら、強制収容所の独房の中で展開されるカスナーの回想に、注目すべき箇所を指摘することができる。彼の回想では、戦いの最中、同志が次々と倒れていく場面で「死すべきこのような転倒がすべて、星々の無関心さや大いなる静寂の中で取るに足りないもののように思われる」« *toutes ces chutes mortelles semblent dérisoires dans l'indifférence et le grand silence des astres* » (TM, III, p.800) と言及されているのである。ここでは、「死すべき」という単語で示される人間の死と、「星々」という単語で象徴される宇宙あるいは人間の力の及

ばない存在との関係が示されていると言える。そして、その後者を特徴づける単語として掲げられているのが「無関心」という名詞なのである。このような人間の死に対する宇宙の「無関心」は、同じく人間の力の及ばない対象として後半に登場する嵐を彷彿させるだろう。興味深いことに、この描写で用いられている« chutes »という単語には「転倒」の他に「墜落」という意味も見られる。「死すべき転倒」、言い換えると、「死すべき墜落」とは、嵐の中を飛行する主人公の危機を想起させるものであると言っても過言ではない。前半で語られる回想を伏線として、嵐には「無関心」というイメージが付与されていると見なすことができる。嵐もまた、人間の死に対して「無関心」な宇宙あるいは人間の生命を尊重しない世界の在り方の一つの側面を担っていると言えよう。つまり、『侮蔑の時代』では、行為者が人間であれ、人間の力の及ばない存在であれ、不条理とも言うべき暴力を通して、人間の「生命の軽視」が提示されていることが分かる。そして、その際、行為者は勿論、その暴力の対象となる人間にも生命を尊重しない様子が窺えるのである。

ところで、人間が生命の危機に直面する局面において、主導権を握るのは「身体」となることは既に確認したが、強制収容所の独房における次の引用を通して、生命を尊重せずに自ら「死」を望む人間とその「身体」との関係について考えてみよう。

彼（カスナー）には非常に傷つきやすいものだと思われていた彼の身体は、その時、表立ってはいないものの、打ち負かされ難い生命を抱いて生きていた。心臓と呼吸は、骨でできた檻によって守られていたのである。「まるで人間がどんな時でも自殺をしたがっているかのように、自然はすべきことをするのだ。」(TM, III, p.803)

この引用には、「自殺」を望む人間と、強靱な「生命」を担う「身体」との対立を指摘することができる。いわば「生命を軽視」する人間と、「生命」を保全して持続し続ける「身体」の対立である。このような「身体」の強靱さは、カスナーが自殺を試みる場面でも繰り返されることになる。彼は、「安らかに死ぬこと」の必要性から、自分の爪を手首に突き立てる方法を実行するが、その試みは失敗に終わり、「肉体は、彼が思っている以上に弾力性がありかつ堅かった」という結論が述べられることになる (TM, III, p.803)。「身体」は、自殺という人間の行動傾向の一つに対する一種のアンチテーゼと言うべき役割を果たしているとして見なすことができよう。ちなみに、失敗ながらもカスナーが選択した行動、具体的に言えば、牢獄で拷問による死を目前にして自殺を選択するという行動は、マルローが『侮蔑の時代』の発表の前、1933年に出版した小説『人間の条件』²⁰を彷彿させる。『侮蔑の時代』の「身体」について考察を進めるために、先に『人間の条件』について確認しておく必要があるだろう。

この小説は、1927年に上海で起こった暴動から蒋介石による中国共産党の粛清に至るまでの3週間を描いた一種の群象劇となっている。次に挙げる引用は、主要登場人物の一人である清（キヨ）が、中国共産党員として逮捕されて牢獄に入れられた後、拷問を受けて死ぬべく連行されていく同志を見ながら自殺を選択する場面となる。

清は、仰向けになって、腕を胸の上に直し、目を閉じた。それはまさしく死人の姿勢だった。彼は、体を伸ばし、身動きせず、目を閉じて、自分自身を思い描いた。顔は、死後

一日の間に、ほとんどすべての死体に分け与えられる静謐さによって穏やかである。あたかも、最も悲惨な人々の尊厳さえ表現されなければならないかのように。彼は、これまでに、多くの人が死んでいくのを見てきた。そして、日本の教育のおかげで、自らの手で死ぬこと、自分の人生にふさわしい死を遂げることを美しいことだと常に考えてきた。そして、死は受け身だが、自死は行為であると。(CH, VI, p.734)

自殺に対して「美しい」という形容詞が用いられていることから、清にとって、自殺が価値のあるものとして肯定的に認識されていることが分かるだろう。そして、その後、結局、清は青酸カリで自死を遂げることになるが (CH, VI, pp.735-736)、ここで留意したいことは、『人間の条件』と『侮蔑の時代』における行動の変化である。両作品では、ともに主人公が拷問を控えながら牢獄に入れられるという状況が設定されている。しかし、その状況に対峙する方法として、前者では自殺が実行されているのに対して、後者では自殺が未遂に終わると同時に「身体」の価値の再評価が行われているのである。『侮蔑の時代』は、「身体」を一つのキーワードに、『人間の条件』とは異なる人間の在り方を提示している。それは、人間に関する「新しい要素」として見なすことができよう。

おわりに

『侮蔑の時代』は、プロットの観点から概観すれば、前半と後半、大きく二つの部分に分けられる。そして、それぞれの部分には、主人公カスナーにとって、生命の喪失に至るべき危機的な状況が設定されている。前半は人為的に構築された強制収容所という「場」においてであり、後半は人間を取り巻く宇宙、具体的には自然の脅威となる嵐においてとなる。作品中、主人公の「身体」は「精神」に対して劣ったものとして見なされていて、不条理とも言うべき圧倒的な暴力の対象となり、虐げられた存在として提示されている。しかし、それと同時に、カスナーが、まさに生命の喪失の危機を迎える局面において、「身体」は「精神」に先行しながらあるいは「精神」に対して優位な立場を取りながら機能する。そして、そこには性的なイメージも加味されている。このような「身体」の特徴は、同作品の発表以前にマルローが手掛けた2つの小説、東洋を舞台とする『西欧の誘惑』と『王道』にも見出されるものである。『侮蔑の時代』は、それらの作品が提示する「身体」の主題を引き継ぎながらも、物語の舞台を西洋に移すことで、西洋における「身体」の問題を、東洋との比較による相対化されたものから絶対的なものへと移行させていると見なすことができるだろう。そして、「身体」は、作品のタイトルに刻まれた「侮蔑」という言葉が意味するもの、いわば「生命の軽視」に対抗する役割を担うものとして描かれているのである。それは、『侮蔑の時代』に先立つこと2年、「自ら死ぬこと」、いわゆる「自死」を人間の取るべき行動の一つとして描き出した『人間の条件』とは異なる人間の在り方となる。『侮蔑の時代』において、「精神」は自ら死を選択する傾向を有するものとして、「身体」はこのような「精神」に対峙する強靭さを有するものとして見なされている。強靭な「身体」を通して生き続ける人間という存在が提示されているのである。人間の世界や人間の力の及ばない宇宙の不条理に対峙する人

間はどのように生きるべきか？マルローは、処女作から一貫してそのことを問い続けてきた。『侮蔑の時代』は、人間の在り方における「新しい要素」を示すことで、その問いに対する新たな一つの答えを提起していると思えることができるだろう。

1936年、芸術の持つ価値や現実社会に対する実践的な力を示すことを目的として『侮蔑の時代』を戯曲へと翻案し上演したフランスの作家アルベール・カミュ（1913-1960年）は、その後、哲学的エッセー『シーシュポスの神話』（1942）を発表する²¹。そして、その中で、「身体」の判断は確かに精神の判断に匹敵するものであり、身体は消滅を前にして後退する。我々は、思考する習慣を獲得する前に、生きる習慣を身につけるのだ」と述べている²²。カミュによれば、「身体」と「精神」、両者が下す判断は優劣のない同等の価値を有する。彼はまた、「生命」も含めてあらゆるものが無に帰するという不条理な状況において、一見すると敗北者のように尻込みする「身体」こそが、人間の本質とも言うべき「生」へと人間をつなぎとめる役割を果たすことになる」と語っている。こうした彼の言葉は、まさにマルローが『侮蔑の時代』における「身体」の表象を通して提起したことだと言えるだろう。マルローが見出した人間の在り方の一つの側面は、あたかも時代に通底する声のように、世代を越えて、同時代を生きるカミュの言葉の中にも反映されていると考えることができるのではないだろうか。

注

1. André Malraux, *Le Temps du mépris* (abrégé, *TM*), in *Œuvres complètes*, t.1 (Paris : Éditions Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1989, 1^{ère} éd., Éditions Gallimard, 1935). 各引用後の括弧内に、出典の省略記号と章番号、頁数を示す。また、和訳および引用の下線は論者による。なお、和訳は以下を参考に論者が訳出した。マルロー(小松清訳)『侮蔑の時代』、新潮社、「新潮文庫」、1950年。
2. マルローの当時の活動や執筆の背景、出版の経緯については以下を参照。Jean Lacouture, *Malraux, une vie dans le siècle* (Paris : Éditions du Seuil, « Points Histoire », 1973), pp.153-175. Curtis Cate, *Malraux*, traduit de l'anglais par Marie-Alyx Revellat (Paris : Éditions Flammarion, 1993), pp.240-279. Clara Malraux, *Le Bruit de nos pas, IV : Voici que vient l'été* (Paris : Éditions Bernard Grasset, 1973), p.147-p.287. Walter G. Langlois, « Malraux à la recherche d'un roman : *Le Temps du mépris* », in *Via Malraux*, écrits réunis par David Bevan, avec la collaboration de Françoise Dorenlot, Christiane Moatti, Robert Thornberry (Wolfville : The Malraux Society Acadia University, 1986), pp.137-150. Christiane Moatti, *Les Personnages d'André Malraux. Le Prédicateur et ses masques*, préface d'André Brincourt (Paris : Éditions Publications de la Sorbonne, 1987), pp.333-344. Robert Jouanny, « André Malraux et la difficile genèse du *Temps du mépris* », *Littératures*, n^{os} 9-10 (Toulouse : Éditions Presses Universitaires du Mirail, 1984), pp.333-341. Robert Jouanny, « Notice » du *Temps du mépris* d'André Malraux, in *Œuvres complètes*, t.1, *op.cit.*, pp.1366-1385. 村松剛『評伝アンドレ・マルロー』、新潮社、「新潮選書」、1972年、222-256頁。

3. Jean Lacouture, *op.cit.*, p.157. Curtis Cate, *op.cit.*, p.260. Clara Malraux, *op.cit.*, p.268. Walter G. Langlois, *art.cit.*, p.140. Christiane Moatti, *op.cit.*, p.336. Robert Jouanny, *art.cit.*, p.333. Robert Jouanny, *art.cit.*, p.1367.
4. その点について、ロベール・ジュアニーが言及している。Robert Jouanny, *art.cit.*, p.1367. なお、ウィリー・ブレーデルの略歴や著作については、以下を参照。高村宏「ウィリー・ブレーデルの抵抗文学『試練』と『汝の未知の兄弟』について」、『ドイツ文化／中央大学ドイツ学会』第10・11号、中央大学出版部、1969年、17-38頁。
5. Clara Malraux, *op.cit.*, p.268 : « Voici Bredel, déguisé en Tyrolien : il sort des prisons nazis. Le récit qu'il fera de sa captivité servira de point de départ au *Temps du mépris*. »
6. Walter G. Langlois, *art.cit.*, p.137. Robert Jouanny, *art.cit.*, pp.333-334. Robert Jouanny, *art.cit.*, p.1367.
7. Robert Jouanny, *art.cit.*, p.1369.
8. *Ibid.*, p.1368.
9. Jean Carduner, *La Création romanesque chez Malraux* (Paris : Librairie A.-G. Nizet, 1968) , p.81.インタビューに関しては以下を参照。Roger Stéphane, « Où le militant devient romancier... », in *André Malraux, entretiens et précisions* (Paris : Éditions Gallimard, 1984) , p.75 : « *Le Temps du mépris* : juste après la Libération, je rapporte à Malraux que les communistes – que j'avais côtoyés dans les prisons de Vichy – appréciaient ce livre : – *Naturellement, c'est un navet*. – La préface est belle. – *Aujourd'hui encore, je n'en changerais pas une virgule*. »なお、引用中のイタリック体は著者により、下線 (« un navet » 「駄作」の意) は論者による。
10. Marcel Arland, « Les Valeurs de Malraux », in *Les Critiques de notre temps et Malraux*, présentation par Pol Gaillard (Paris : Éditions Garnier Frères, 1970) , p.69. 初出は « Les Valeurs de Malraux », in *N. R. F.* (Paris : Éditions Gallimard, juillet 1935)。
11. Walter G. Langlois, *art.cit.*, pp.147-148.
12. 拙稿「マルロー『西欧の誘惑』における身体性の萌芽」、『フランス文学論集』第47号、九州フランス文学会・日本フランス語フランス文学会九州支部、2012年11月、1-14頁・59頁。
13. André Malraux, *La Tentation de l'Occident*, in *Œuvres complètes*, t.1 (1^{ère} éd., Éditions Bernard Grasset, 1926) , *op.cit.*.アンドレ・マルロー (村松剛訳)『西欧の誘惑』、『世界文学全集・サン＝テグジュペリ／マルロオ』第77巻、講談社、1977年。
14. André Malraux, « Appendice : André Malraux et l'Orient », in *Œuvres complètes*, t.1, *op.cit.*, p.114 : « L'Asie peut-elle nous apporter quelque enseignement? Je ne le crois pas. Plutôt une découverte particulière de ce que nous sommes. »初出は *Les Nouvelles littéraires*, 31 juillet 1926. 引用中の下線は論者による。
15. 巨人ティテュオスの神話については以下を参照。トマス・ブルフィンチ(大久保博訳)『完訳ギリシア・ローマ神話』下巻、角川書店、「角川文庫」、2011年(改訂版5版)、115-116頁。

16. André Malraux, *La Voie royale*, in *Œuvres complètes*, t.1 (1^{ère} éd., Éditions Bernard Grasset, 1930), *op.cit.*. マルロー (滝田文彦訳) 『王道』、『新潮世界文学・マルロー』第45巻、新潮社、1970年。
17. 拙稿「マルロー『王道』における身体性」、『待兼山論叢』第39号文学篇、大阪大学文学会、2005年12月、77-92頁。
18. André Malraux, « Appendice : André Malraux et l’Orient », *art.cit.*, p.114 : « L’objet de la recherche de la jeunesse occidentale est une notion nouvelle de l’homme. »なお、引用中の下線(« une notion nouvelle de l’homme » 「新しい人間の概念」の意) は論者による。
19. マルローは、1934年3月、友人の飛行家コルニリオン=モリニエとともに、シバの女王の都とされる遺跡を発見するためイエメンへと飛行し、伝説の都だと思われた場所を空中から写真撮影する。その後、エチオピア、アルジェ、バルセロナ、リヨンを経由してパリに戻る際に嵐に遭遇した。この経験については以下を参照。Curtis Cate, *op.cit.*, pp.240-252. マルローのこうした経験は、年代的にも飛行中に嵐と遭遇するという状況的にも『侮蔑の時代』との関連が窺える。実際、村松剛は、このマルローの経験を紹介しながら、『侮蔑の時代』における嵐の場面と関連づけて論じている。村松剛、前掲書、228-240頁。
20. André Malraux, *La Condition humaine* (abrégé, CH), in *Œuvres complètes*, t.1 (1^{ère} éd., Éditions Gallimard, 1933), *op.cit.*. 各引用後の括弧内に、出典の省略記号と章番号、頁数を示す。また、和訳および引用の下線は論者による。なお、和訳は以下を参考に論者が訳出した。マルロー (小松清・新庄嘉章訳) 『人間の条件』、『新潮世界文学・マルロー』第45巻、前掲書。
21. Albert Camus, *Le Temps du mépris, d’après le roman d’André Malraux*, in *Œuvres complètes*, t.1, 1931-1944 (Paris : Éditions Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2006).
22. Albert Camus, *Le Mythe de Sisyphe*, in *Œuvres complètes*, t.1, 1931-1944 (1^{ère} éd., Éditions Gallimard, 1942), *op.cit.*, p.224 : « Le jugement du corps vaut bien celui de l’esprit et le corps recule devant l’anéantissement. Nous prenons l’habitude de vivre avant d’acquérir celle de penser. »なお、引用の下線は論者による。また、和訳は以下を参考に論者が訳出した。アルベール・カミュ (清水徹訳) 『シーシュポスの神話』、新潮社、「新潮文庫」、1969年、17頁。